

2026.07.05.

「羊の門と羊飼いと盗人」

旧約 創世記 28 章 10～17 節

新約 ヨハネによる福音書 10 章 1～10 節

1. はじめに

今朝与えられている御言葉はとても有名なイエス様の「たとえ話」です。聖書に馴染んでいない人、教会に来られていない人には、何を言っているのかさっぱり分からない話かもしれません。今朝与えられている御言葉の中においても 6 節で「イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。」と記されております。当時のファリサイ人でさえ何を言われているのか分からなかったのですから、現代の日本人に分からなくても当たり前ということかもしれません。しかし、教会に少し通いますと、ここで用いられている「羊と羊飼い」のイメージは、教会の中ではしょっちゅう用いられていることに気づきます。そもそも教会で信徒の方々を指導する役目の人、教会に責任を持っている人のことを「牧師」と呼びます。この「牧」という言葉は元々「家畜を放し飼いにする」ことを意味しますので、「牧師」というのは文字通り「家畜を放牧する者」つまり「羊飼い」のことを指しています。その場合、信徒の方は羊ということになります。もっとも「良い羊飼い」或いは「まことの羊飼い」というのはイエス様のことなのですが、このことについては来週御言葉を受けます。

この「羊」と「羊飼い」のたとえは、旧約聖書からずっと続いている「神の民と神様との関係」を示す重要なイメージの一つです。イエス様が語られた話の多くは、旧約に記されていることをベースにしていることがほとんどです。ここでもそうです。「羊」と「羊飼い」と言えば、有名な詩編 23 編を思い起こされる人も多いでしょう。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。23:2 主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い／ 23:3 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。……」これを思い起こす人もいるでしょう。この詩編 23 編では、はっきり「主は羊飼い」と告げています。そして、「羊」は私です。この詩編は羊である私を羊飼いである神様は、いつも養い、導いてくださり、祝福と平安とを与えてくださると神様に対しての信頼を歌っています。この「わたし」というのは、具体的な私という個人だけを指しているのではなく、「神の民、イスラエルの一員としてのわたし」ということです。羊と羊飼いの関係は、旧約以来イスラエルの人々にとって最も身近で、分かりやすい例えとして用いられてきました。イエス様の時代でも、羊飼いに飼われている羊はいたる所におりましたし、羊飼いは

最も一般的な職業の一つでした。イエス様がお生まれになられたときに、天使達から救い主の誕生を告げられたのも野宿していた羊飼いでした（ルカによる福音書 2：8 以下）。

2. 羊と羊飼い

ここで、実際の羊と羊飼いの関係を確認しておきましょう。羊というのは最も早く家畜化された動物の一つで、メソポタミア地方や中東においては 7000 年前くらいから家畜とされていました。家畜となった羊は、羊飼いがおりませんと生きていけません。羊は極度の近視で、目の前のものしか見えません。ですから、放っておけば目の前の草を根こそぎ食べてしまいます。そうすると牧草地ではなくなってしまうので、適当に羊飼いは移動させます。また自分で水場を探したり、次の餌の草原を自分で見つけて移動することも出来ません。羊飼いが毎日、羊たちを草原に導き、水辺へと連れて行くわけです。また、家畜化された羊は群れで行動します。迷い出た一頭の羊は獣に襲われてしまいますので、羊飼いはそのような羊が出ないように見張っていなければなりません。そして、羊飼いにあって羊は、衣食住の全てをまかなってくれる貴重な食料であり財産でした。羊の肉や乳は食料に、毛は衣料に、そして皮はテントの材料や羊皮紙という紙のようなものとして、そして利用されました。農耕民にとって富とは、田畑の広さということになりますけれど、遊牧民にとって土地は意味を持ちません。彼らにとっての財産の多さは、家畜の数で決まりました。中でも羊は最もたくさん飼われておりました。私共には、家畜の羊の群れの一頭一頭を区別することなど出来ませんが、羊飼いは羊を大切に、その一頭一頭を区別することが出来ました。そして、その一頭一頭を心にかけて、状態を把握し、対応しました。また、羊を襲う獣から羊を守るのも羊飼いの大切な仕事でした。このような羊と羊飼いの関係を前提として、イエス様はここで記されたたとえ話をされました。

3. 羊の囲いと門

イエス様はまずこう告げました。1. 2 節「**はっきり言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。 10:2 門から入る者が羊飼いである。**」羊飼いは朝には囲いから羊を出して、野原に行きます。そして、日が沈む前に戻ってきて囲いの中に入れて夜を過ごします。獣から羊を守るためです。この囲いはかなりしっかりしたものです。ここで「羊の囲い」と言われているのは、神様の守りの御手の中にあるところを指しています。これを神の民、神様の救いに与ること、キリストの教会、あるいは神の国・天の国を指していると理解してよいでしょう。7 節と 9 節を見ますと「**わたしは羊の門である。**」また「**わたしは**

門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。」とイエス様は言われていますので、羊の囲いに入るためには、つまり神様の救いに与るためにはイエス様という門を通らなければ入れないということになります。あれ？イエス様は門なのか、それとも羊飼いなのか、どっちなのか？いささか混乱されるかもしれません。しかし、語られていることは少しもややこしくありません。神の民の一員となり、神様の救いに与るためには、イエス様という門を通らなければならない。つまり、イエス様をメシア、神の子として信じなければならない。そして、イエス様はそのような者を羊飼いが自分の羊を守るように、ご自分の羊として守り、支え、導き、養ってくださるということです。

イエス様という門を通らなければならない。これはイエス様を神の子・救い主として信じなければ、神様の羊の囲いの中には入れない、つまり救われないということです。羊の囲いの門というものは、幾つもあるわけではありません。一つしかありません。ですから、それ以外に救いに至る道はないということです。ここで私共は9章に記されておりました「生まれつき目の見えない人が癒やされた」という出来事を思い起こします。このイエス様によって癒やされた人は、ファリサイ派の人達の前で「自分を癒やしてくれた人は、神のもとから来られた方である」と告白しました。その結果、彼はファリサイ派の人達に追い出されてしまいましたが、イエス様はその人に出会い「主よ、信じます」という信仰告白へと導き、彼はイエス様を拝みました。実に、この人はイエス様という門を通り、救いへと導かれたわけです。

4. 盗人

では、この人を追い出したファリサイ派の人達はどのようなのでしょうか？彼らはイエス様という門を通らずに、神の羊の囲いの中に入れると信じていました。しかし、イエス様はここで明確に「(私という) 門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。」(1節)と告げられました。つまり、ファリサイ派の人達は盗人であり強盗だとイエス様は告げられたわけです。何を盗むのかと言えば、神様の羊です。神様の羊の囲いにいる羊は、神様のものです。神様の救いの恵みに与る者たちです。しかし、ファリサイ派の人達は「イエス様を神の子・救い主として信じる」のではなくて、「神様の律法を守るといふ、自らの力と真面目さと熱心によって救われる」と教えることによって、神様の羊を救いから遠ざけ、神様の羊を奪い取っている。そうイエス様は告げられたわけです。盗人や強盗は、それらしく見えるわけではありません。羊飼いのような振りをします。見ただけでは分からないかもしれません。しかし、「イエス様を神の子・救い主として信じる」という一点に立ち、救いを告げ、羊を導くかどうか。そこに全てが掛かっているということ

です。

しかし、それは何もイエス様の時代のファリサイ派の人に限ったことではありません。イエス様という門を通らなくても救いに与ることが出来ると考え、それを人に勧める人は誰でも、いつの時代でも盗人であり、強盗です。ここで、キリスト教会の歴史を振り返ってみることもできるでしょう。「羊の囲い」をキリストの教会と理解すると、イエス様というただ一つの門以外の出入り口があると語ったことが全くなかったかということです。ファリサイ派の人達は「律法を守って救われる」と告げたわけですが、キリストの教会においてもその時代の思想や正義を振りかざし、これを行うことによって救いの門は開かれると理解し、教えることはなかったかということです。現代で言えば反差別であったり、人権擁護であったり、貧富の格差解消であったり、戦争反対であったりそのために行動し運動することが救いへの道であるかのように受け止めたことはなかったかということです。それら一つ一つについて異論はありません。しかし、それが唯一の羊の門であるイエス様を通ることになるのかといえ、それはならないでしょう。その時代の正義や思想の動きというものは、時代とともに次々に新しく生まれ、まためまぐるしく変わっていきます。100年も続くものなどほとんどありません。しかし、イエス様という羊の門は、決して変わることも動くこともありません。イエス様の十字架によって自らの罪を赦していただいた者は、羊の囲いに入れていただきます。つまり、神様の救いに与ります。それがイエス様によって開かれたただ一つの救いの道です。

そもそも、神様の羊はイエス様の声を聞き分けることができますから、盗人・強盗の言うことはききません。5節に「**ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。**」と告げられている通りです。「ほかの者」とは、門から入って来なかった者、盗人・強盗です。神様の羊は、これらの者の声を知らないのです、これが言うことに従って行くことにはない。逃げ去るのです。それは自分の大切な、本当の羊飼いが与えてくれる平和、喜び、感謝、命、希望を奪われてしまうからです。私共が生きていく中で、様々な声が聞こえてきます。習慣や「しきたり」だったり、「こうするものだ」と言われることもあるかも知れません。また、損得の計算も働かし、どうすれば周りの人を傷つけないかとも考えます。そうすると本当にどうすればいいのだろうかと思ひ悩み、身動きが取れないといういうことも起きるでしょう。勿論、そんな雑音は全て無視すれば良いとは言いません。しかし、本当に聞かなければならない声は、イエス様のみ声ですから、それをちゃんと聞く、正しく聞く、それが何より大切だということです。その御声を聞くために、私共は主の日の度ごとにここに集っているわけです。

5. 羊飼いの声を聞き分ける羊

では、羊飼いであるイエス様と神様の羊である私共との関係は、どのようなものなのでしょうか。2－4節でイエス様はこう告げられました。「10:2 門から入る者が羊飼いである。10:3 門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。10:4 自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。」ここで三つのことが告げられています。①羊は羊飼いの声を聞き分ける。②羊飼いは羊の名を呼ぶ。③羊飼いは先頭に立ち、羊はそれについて行くということです。

①羊は羊飼いの声を聞き分ける。

これは大切な事です。今申しましたように、その時代の思想や正義といったものは、空気のようにその時代に生きている人に影響を与えます。私共とて例外ではありません。しかし、私共は羊飼いであるイエス様の声を知っています。勿論、イエス様が枕元に立ってくださって声を聞いたわけではありません。しかし、私共は知っています。それは、毎週主の日の礼拝において、イエス様の霊である聖霊なる神様によって語りかけられているからです。罪の赦しの福音を聞いているからです。それは私共に永遠の命を与えるみ声です。権威あるお方のみ声です。私共のために十字架にお架かりになられたお方のみ声です。そのみ声とこの世の正義や思想を声高に叫ぶ者の声を私共は聞き分けることができるということです。それは、囲いの門を通るとき、イエス様のみ声を聞いたからです。それは「私はあなたを決して見捨てない。あなたの一切の罪を赦す。あなたを愛し通す。私に従いなさい。」というみ声でした。そのみ声と共に私共は新しくしていただきました。神様の子としていただきました。このイエス様のみ声を聞いて救われた人は、そのみ声を忘れることはありません。私共が主の日の度ごとに礼拝において御言葉を通して、このみ声を聞いているわけです。

②羊飼いは羊の名を呼ぶ。

そして、イエス様は私共一人一人の名前を呼んでくださいます。私共はみんな別の名前を持っているわけですから、それぞれに名前を呼ばれるということは、一人一人を別な者としてイエス様は私共を認識し、対応してくださるということです。百頭も羊がいれば、どの羊がどれなのか、私共にはさっぱり分かりません。しかし、イエス様は私共一人一人を覚えてくださり、名前を呼び、私共がその時、その時に必要な御言葉を与え、道を開き、出来事を与え、導いてくださいます。イエス様は私共を十把一絡げで取り扱われることはありません。

一人一人の名前を呼ぶということから、私はここでヨハネによる福音書11章38節以下に記されておりますラザロの復活の場面を思い起こします。イエス様は既に死んで4日経ったラザロ、腐敗臭を放っていたラザロ、これに「ラザロ、出てきなさい」とイエス様は告げられました。文字通

りイエス様はラザロの名を呼ばれたわけです。するとラザロは墓から出てきたのです。私はこの地上での生涯が閉じられた後、骨となり、墓に葬られます。そしてイエス様が再び来られた時に、この情景と同じく「小堀康彦、出てきなさい」と告げるイエス様の声を聞く。そして、私は復活することになる。そう信じています。皆さんの名前も呼ばれます。私共の愛する者たちの名前も呼ばれます。そして、復活します。

③羊飼いは先頭に立ち、羊はそれについて行く

羊飼いであるイエス様は、私共の先頭に立って導いてくださいます。私共はこのイエス様の後に従って行きます。羊は群れで行動どうしますけれど、私共も愛する兄弟姉妹と共に、一群となってイエス様について従っています。このイメージはとても大切です。私どもは、自分一人で信仰者としての歩みを為しているかのように思ってしまうときがあるからです。しかし、それは違います。私共の前後左右におびたしい数の聖徒たちがいます。そして、私共の群れの先頭にはイエス様が立ち、歩みを進めておられます。イエス様が先頭に立っておられるということは、邪魔するものを取り除き、羊たちが行けないところは避けて、導いてくださっているということです。ですから、実に安心して良いということです。また、イエス様に従って行くということは、イエス様に倣って行くということでもあります。勿論、私共は罪人ですから、イエス様と同じことが出来るわけではありません。しかし、模範がある、手本があるということは、全く何もなく手探りで歩んで行くのとは全く違います。そして、何よりも多くの聖徒たちと群れを組んで歩んでいる。そのことを忘れてはなりません。私共の信仰の歩みは、決して孤独ではありません。ここからまた、神様の羊として、先立ち給ふイエス様に従って、愛する兄弟姉妹と共に、代々の聖徒たちと共に、御国に向かって歩んでまいりたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

今朝はイエス様のたとえ話を通して、イエス様が救いの門であり、羊飼いであることを教えていただきました。私共はイエス様の十字架のによって贖われ、神の子としていただき、永遠の命に生きる者としていただきました。ありがとうございます。どうか、私共がイエス様のみ声をしっかり聞いて、そのみ声に従って、代々の聖徒と共に御国への歩みを健やかに歩いていくことが出来ますよう心から祈り、願います。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン